

○陸地測量部出版地圖目錄（昭和十一年四月三十日）

五萬分一地形圖 修正

一關	六號	盛岡	一面	福島	七號	川俣	一面	豐橋	二號	水窪	一面	高知	七號	高知	一面
同	十二號	志津川	一面	白河	四號	大津	一面	岐阜	三號	義濃町	一面	窪川	九號	石碓	一面
石卷	九號	登米	一面	靜岡	十四號	千頭	一面	田邊	二號	新宮	一面	同	十四號	上川口	一面
村上	十號	笹川	一面	豐橋	一號	和田	一面	同	十一號	周參見	一面	同	十六號	足摺崎	一面

江州信樂燒の立地的觀察（二）

杉山精一

一、緒言

二、史的展望

三、地理的分布

四、立地的要素

(1) 自然的要素

地勢・氣候・原料・燃料・動力

(2) 人文的社會的要素

窯・勞働力・資本

五、販賣市場

取引形式・消費市場

六、生産及製品種類

七、結論

一、緒言

信樂燒の産地は滋賀縣の南部甲賀郡信樂町・長野・神山、雲井村字勅旨・黄瀬、小原村字小川出の三村に跨る昔より所謂信樂郷に屬する處

で、伊賀國境を走る笠置山脈の北に位し、四圍峻嶮なる山岳にて外へ出るには、必ず嶮しき峠を越ねばならぬ、至つて交通に恵れない盆地で此の峠が人文的障壁の價値に影響すること甚大で、聚落構成にも特別の發生原因が存在し、生産品にても或る特別の器物を以て他の陶業地に對抗し來れる現狀に興味を感じ、昨夏の數日を此地に送つた。こゝに纏めし一部を述べ大方の御指導を仰ぎ後日の研究資料に致したいと存じます。

二、史的展望

(イ) 原始時代

信樂燒の起原は古く今より千二百年前聖武天皇の朝、離宮を此地に御造營、その紫香羅の宮跡に古瓦の發掘、天正十五年大佛の第一回鑄造地として名高く、之に必要な陶器製埴塙が焼かれたらしく窯の谷に残れる穴窯が證明する、しかし土器使用の住民は何時頃か記する材料な

し。延喜式によると朝貢國である特に陶器作りが優れてゐた。平安時代になり内亂及新興品のため振はず。

(ロ) 種壺時代

源賴朝が天下を支配したるため人民は安心して農業に親み商業は長足の進歩し、農民は種子の需要増加したために貯藏の必要を感じ、弘安時代になり、種壺種浸の生産となつたが、然し交通不便のため販路は限定されてゐた。種浸は古信樂といひ、素地が粗雜で砂を含み甚だ堅硬であつて、釉は濁黃色その上に淡青色の釉を掛けた上等品である。

(ハ) 茶壺・茶器時代

延暦二十四年僧最澄が唐より茶子を滋賀縣坂本村に輸入し、其後建久二年僧榮西が宋より茶子を入れ宇治桐尾に栽培してより茶業發達し、こゝに茶壺の生産に變化した。足利時代に入り茶道流行し、茶壺需要益々増加し、京都を中心に茶入・抹茶々碗・水指・茶器が使用され、信

長の時泉州の武野紹鷗が厚作り茶器を作り之を後世紹鷗信樂といふ。秀吉の時代になり茶道隆盛となり、徳川家光に至つてこの信樂の土を以て小堀遠江守政一の遠州信樂・本阿彌空中の室中信樂・野々村仁清の仁清信樂・宗旦の宗旦信樂として知られ、信樂茶器の名聲を博した。之は銘茶を貯へて香氣が變らない特色で著名である。

(二) 茶 入 時 代

徳川中期になり一般民衆が茶の飲用を好み、朝廷幕府の御用品・諸大名の愛用・大衆の日用品進出のため、作家も自ら古朴の風趣を脱却し日用品を重じたる結果、茶器と同様に日用品が多量多産に陥つた。日用品としては梅壺・水壺・味増壺・油壺・御齒黒壺・棺壺・徳利・菓子壺・焼酎壺、及び火鉢・焜爐・皿・行平・土鍋・摺鉢・花瓶・急

須・土瓶・水指・油指・油皿・植木鉢・神佛用陶器等を生産した。

(木) 家具及裝飾時代

明治初年に廢藩となり、操業は自由となつたが御用茶壺の不用、通貨の下落、鍼力茶箱・藥罐の流行により一時不振となり、製品の種類も變化し、奥田要助氏、糸取鍋の製作を始めて生産の轉換を圖りたるも、交通不便と仲買の惡制度のため利益金を生産設備・擴張に注ぐ事能はず、舊品は益々不振に喘ぎ新製品は販路意の如くならず、加ふるに人口膨脹・失業者増加で不況の底に走つた。谷井直方氏の生海風袖の發見により大體基礎は安定され、次で日露戦争のため飛躍的發展となり大正初年に再び財界不況の反動で減少したが、通じて家具飲食器の生産が盛で家具は大體七割乃至八割に及んだ。

明治三十八年 〃 四十二年	家具		裝飾		飲食器		總計
	金高	構成率	金高	構成率	金高	構成率	
	元、〇〇〇	七五八%	六、五〇〇	六三三%	六、〇一〇	五八%	一〇九、六五五
	一四、一四五	六九六	一〇、六三五	五三三	四、八六二	三三	二〇九、七〇三

(へ) 火鉢 時代

歐洲戰亂後は財界の好景氣の波に乗り更に鐵道開通し交通の不便が除かれたので一層發展性に拍車をかけ、大正年間は大正五年を除き火鉢

は全額の三割乃至七割を占め、常に王座を占め昭和年間になりても常に七割を續け生産覇權を獲得して今日に及べり。

	火鉢		植木鉢		食器		壺類		總計
	金高	構成率	金高	構成率	金高	構成率	金高	構成率	
大正三年	五、三三三	三三三%	五、九七一	三三三%	一、三三四	七	三、〇五四	二二	一七〇、六三三
大正五年	五、七六八	二六〇	一、二三四	四	一、八四四	八	七、二四八	三〇	三九、八八八
大正八年	四〇、七〇〇	五四七	四、五〇〇	六	七、四九七	九	五、八九〇	七一	八六、五二八
大正十一年	四四、六六〇	六〇	五、七八〇	七	二、五五五	三	五、〇〇〇	六四	九四、〇九三
大正十三年	六八、一三三	七六	四、九〇〇	五	二、一七一	二	四、六八〇	五〇	一、〇五九、六二〇
昭和二年	六八、一三五	六二	五、九〇〇	五	一、五四八	二	四、二二五	四六	八九三、四三七
昭和五年	四九、四九〇	七五	四、〇〇〇	六	二、〇〇〇	三	四、七五〇	七	六九五、七七一
昭和八年	五三、〇〇〇	六九五	九、〇〇〇	三	七、〇〇〇	九	一〇、八〇〇	一五	四三〇、〇〇〇

註

- (1) 續日本記には信樂莊といふは宮町・勲旨・神山・小川田・多羅尾・祚原・黄瀬・牧村で朝宮・野尻は信樂の外村である
- (2) 西田與四郎 鈴鹿峠の聚落 地理學評論第二卷第六號
- (3) 商工省工務局 工業調査彙報 第十三卷 第四號
- (4) 日本陶器全書 卷二 九十二頁 近江信樂燒

江州信樂燒の立地的觀察

- (5) 窯業協會 陶磁器工業 上卷 五十五頁
- (6) 日本書記 垂仁記に「新羅王天日槍入近江吾各邑暫居是以近江國鏡谷陶人則天日槍從人也」長野の窯谷も鏡谷で天日槍の從者が陶法傳授
- (7) 松本佐太郎 本邦陶磁發達考 窯業雜誌 四十二卷 延喜五年醍醐天皇が制定を發せられ諸國の朝貢を定め給

ひし時、近江・美濃・播磨・大和・河内・攝津・和泉・備前・讃岐・筑前の十國は製する陶土器を以て役に充てしめられた。大なるは池田加及應各一口を以て八丁に充て小なるは燈臺二百口を以て一丁に充つ等品種と國別費別によつて綿密なる定めがあつた。一丁に充つとは役十日に相當せしむる謂なり。池田加はイケユガで瓶の受五石許、應はミカで受五石許である。

(8) 金森得水 本朝陶器攷證 三卷 三十二頁 「鴨香合、梅林印藍菜白土、耳付小花生同印金氣菜」

(9) 金森得水 本朝陶器攷證 六卷 二十一頁 「永樂保全筆記」

茶道の人茶に用ふる茶盤を造り來る。尤も忙人風流の器なり、利休・道安・少菴・宗旦などは手造花盤は造らざりしと覺ゆ……光悅・空中・宗全・樂只などの作を見るに左にあらず、ペコ造り又ヒネリ造りなり、空中の造りし物を見るに樂只にて焼たる物は稀なり、膳所焼・信樂燒土を以て造るものと思はる。

(10) 御用壺俗に「大かま」一定されてあつて作る事が出來ない、上部に耳四組をつけ中央以下は白色、ために「耳附腰」又「献上壺」といふ、御茶壺の寸法は

- 上 燒
- 一、御進 獻 三尺五寸
- 一、久能御宮 三尺四寸
- 一、日光御宮 三尺四寸

- 一、紅葉山御宮 三尺三寸
- 一、御代御靈屋 三尺三寸
- 一、被進御壺 二尺八寸
- 一、献上御壺 二尺三寸
- 並 燒
- 一、増上寺御靈屋 五尺
- 一、御通 壺 三尺四寸
- 一、御召御壺 三尺二寸
- 一、煎茶御壺 三尺五寸一寸
- 一、御獻備御壺 三尺三寸
- 一、御組頭衆御殘御壺 二尺九分一寸
- 一、御茶湯御壺 二尺一寸一寸五分
- 一、御町奉行御殘御壺 一尺六寸五分
- 一、御役人衆御殘御壺 半斤、小半斤
- 一、諸侯衆御壺 大十斤、四尺四寸一寸三寸五分

御用信樂燒長野村燒物鐵形控(石野里三家保存)

- 一、本碗四ツ組 一、二ツ碗 一、三ツ碗
- 一、坪 一、平皿 一、吸物碗
- 一、鱈皿 一、中皿 一、燒物皿
- 一、小猪口 一、長皿 一、食櫃
- 一、大猪口 一、杓子 右十六品
- (11) 窯業協會 陶磁器工業 上卷 五五九頁
- (12) 松本雅男 信樂陶業の起原及製品の變遷

三、地理的分布

(五萬分ノ一地圖「水口」參照)

山城・近江・伊賀三國に接し、四面山に圍まれたる信樂盆地は原料豊富のため昔より陶業發達し一進一退を示し、徳川時代に至り南の伊賀陶業の發展に打撃を受け衰へたりとは云へ、京阪の經濟都市を持つ關係上困難なる期を切り抜け來つた。盆地内の原料の各埋藏地近く陶業發達し、大體に製品の地域的集積が顯著である。

長野

火鉢・紅鉢・植木鉢・系取鍋・壺・便器・日用品等
主として壺・火鉢・系取鍋が特長である。

神山

行平・土鍋・急須・茶碗・皿
神佛用陶器・土瓶・食器

勅旨

燈明土器・油差徳利・搔立棒子・高臺・秉燭

朝宮

高原燒・小器物

以上、長野・勅旨・黄瀬は大物小物を、神山・朝宮は小物のみを産す。而して長野が過半数を生産する中心地であるから信樂燒と云へば長野の生品が代表するといつてよい。

江州信樂燒の立地的觀察

朝宮陶業は創期詳でないが、上朝宮の古墳よりの瓦器の蓋坯より祝部時代かと推考されるが交通不便のため振はず、黄瀬陶業は元勢州神戸城主雲林院小監飯笹長久入道が伊賀丸柱より移したりと云へども原料惡しきため振はず、長野のみは附近に良質粘土が豊富にあり、陶器獨特たる技術傳授が血族的關係基礎により確保され又壺作り職人が多數居住のため昔茶壺は長野に製作を命ぜられると共に長野のみ壺燒く權利を認められ、獨占的立場より一層發展に拍車をかけ近代になり原料が大物を製するに最も好都合なるため生産設備と相俟つて斷然と頭角を現し一大集散地と化した。

四、立地的要素

空間と場所とを通じて經濟現象を見ると「經濟立地」が成立する。立地の概念は農業の土地と氣候とを基礎として之に栽培する植物に及ぶが如く、工業に於ては自然要素たる原料・燃

料・動力に更に社會的・人文的要素たる勞働力・資本・工業政策・運賃・交通・地代等に支配され、兎に角複雑な人文現象の表現であつて、現實の立地形態は顯在的條件として工業を牽引する有効尺度を知ることが必要である。又、陶業地帯は比較的に大なる空間にわたつて或種の工業が廣く行はれて複雑工業景觀を呈してゐる。

(1) 自然的要素

(イ) 地勢・氣候

信樂盆地の南は笠置山脈が走り、笹ヶ嶽(七百三十八・八米)が最高峯として分水嶺をなし、山脈は南東より漸次西南に向つて漸次低くなつてゐる。丘陵は花崗岩は各所に於て風化を受け、盆地内を流れる大戸川は北流し、盆地の水を集めて更に西に流れ宇治川に注いでゐるが水勢が豊でないから何等工業的財源を得るに至らない。しかし昔は唯一の交通路であつた。平地は僅かに川の兩岸に形成され、農耕地は農家一戸に○・四反しか當らない貧弱さである。

風は夏西風南風が多く、冬は北及北西風で、雨量は一年平均千八百耗で滋賀縣平均二千耗より少く、降雪は至つて少く平均八寸位なるも、地勢の關係上秋が早く、春が遅くて寒氣が厳しき故開花は貴生川方面より十日も遅れ、柑橘蜜柑類は一本もなく、製茶が農家の唯一の副業である。

(ロ) 原料

工業發達要素は地形・風土・勞力・資本・工業政策に與るとは云へ、原料・燃料及運輸の便否が牽引力の大なる原因となる。特に原料豊富で交通便利のため工業隆盛となつた例は、米國・獨逸を見ても顯著な事實である。陶業の原料たる粘土の如き低價で目方の重き物は、遠方へ移動するを壓ふ故、交通が發達しなければ原料地附近に發達するは當然の事である。

信樂盆地の周圍は花崗岩よりなり、僅かに雲井村の一部(畑)・朝宮村下朝宮の一部(野尻)に於て古生層を見るのみである。何れの丘陵も濃

尾地方の陶業地帯の如く風化を受け、各所に粘土を堆積してゐるも概して鐵分を多く含む。粘土は盆地の周縁の山腹山麓及び畑といはず到處に産するが、その質略同一で總て硅石粒を含み比較的粗雜なる篩過のみで坯土となるから製調費が低廉の上、粘土の粗粒・硅石粒のため粗倣なる焼成による熱の變化に對する安全率大となり、冷め切れ少く、大物製作に最も好都合であり、品質上より見る時到底濃尾地方の粘土に比して競争は出來ない故將來も昔通り大物の實用的方面に進むが唯一の得策かと考られる。

(ハ) 素地土用の原料

二本松 長野の西部に位し、最も便利の良き所で砂利氣の多い粘土である。火によく牙え腰もある故、大物原料に最も好まれるが現在にはほとんど掘り盡された觀あり。

江田 陶器試験場の東約百米程の處で露天掘をしてゐる。この粘土は水簍正味が多いが餘り火には強くない。その賦存狀況は $\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma$ 形で水

平に地表より一米乃至二米の硅石混りの砂、
○・二米乃至一米青粘土(木節粘土を含む)、一米

第一圖 江田の粘土層断面



乃至○・七五米の木節粘土で、その下に白粘土が
現在一米現れ尙地下に續いてゐるやうである。

現に糸取鍋原料として盛に採掘す。

論山 長野の南、小原村の境にかけて一帯の

丘陵に粘土が賦存してゐる。明治初年に於ける硝子、埴埴製造原料となつた由、明治十九年に所有問題につき爭論となり採掘三年間中止の歴史あるを以て論山といふ。砂の多い耐火粘土で各所に露天掘が行はれ、又殘存粘土を取るため坑道掘にかゝつてゐる處があつて採掘益々困難を來してゐる。賦存狀況は $N_{35} W$ で水平に上より砂の次に一米の黒木節粘土(良質)、一米の青色砂粘土、次に二米の木節粘土(一枚の褐炭層を含む)の順にその區域最も廣い。

勅旨 多少有色で、白色は比較的少く吸收性少き粘土である。

黃瀬 東山の粘土は下等で土地で使用し、五人の粘土は上等で鼠色を呈し硅石粘土を混じてゐる。

以上の粘土を調製するに、品物の大物用と小物用の種類に依つて處理を變へる。即小物用は

大物用に比べて優良なるを必要とするから水簾にする。

大物用はその處理最も簡單で篩土を以て足り、單に原料を粉碎し、之を篩⁽²⁰⁾にかけて通過粉末を殘滓泥漿と煉り、一箇八貫目の玉にして素地土を作る。原料粘土を粉碎するは多く女子で之を土はたぐといひ、一日百十貫から百四十貫位はたく。小物用は之を羽二重篩(一寸付篩目百二十)で通過させ、之に小物素地削屑等を混じて玉にする。

粘土の分粒試験左の如し。

二本松	六〇・〇	一四・〇	一・一〇	一五・〇	殘滓
論山	三七・五	一八・五	一五・〇	三二・五	

耐火度試験の結果

長野二本松	ゼーゲル篩	二十七番
黃瀬	同	二十七番
勅旨	同	二十五番
江田	同	二十四番
論山(砂利山)	同	二十九番
朝宮木節	同	三十番

示性分析の結果

黄瀬粘土水鐵物

硅酸 礬土 酸化鐵 石灰 苦土 加里 曹達 灼熱減量
 五五・三 元・七 一・五 〇・五 〇・七 二・四 一・七 八・六

(二) 原料仕入

信樂販賣購買組合は、産業組合法により陶器原料及燃料を共同購入をなし、組合員に分配してゐる。

原料(坯土)の使用高は明治四十四年頃は二百貫位なりしが、現在は約六百貫に上り約三倍に當つてゐる。

坯土は何れも信樂盆地内で自給自足策をなし南の小原村(論山)・江田で過半数に及び北方の雲井村方面は僅か二割である。その内譯は

	供給工場	供給百分率
小原村論山粘土	三五	三八%
信樂町江田粘土	二一	一二
神山 粘土	六	三
雲井村 粘土	一三	一五
丸柱村 粘土	一	／
信樂町二本松粘土	一六	一七

江州信樂燒の立地的觀察

小川村 粘土 一
 次に釉藥原料を見るに他地方より購入するもの多く、仕入先を品別に調べるに

木 灰	京都市・大津市・三重縣河合村・栗太郡沼田村
礬 灰	京都市
廣見石	瀬戸市・濱松市
三雲石	京都山科
硅 石	岐阜縣多治見町
石川石	三重縣阿山郡
來待土	島根縣
着色原料	大阪市
粘土類	町内

更に輸入高を見るに

	明治四十三年	昭和九年
礬 灰	一九七俵 (二、八七・六〇)	二、八七俵 (二、九三・五)
濕灰(木灰等)	二、六二 (二、二〇八・三〇)	八、四〇 (三、三三・五)
廣見石	三、四 (一、五八・三〇)	一、五三 (一、一〇八・三〇)
三雲石	五、四四 (一、八七・四)	七 (二、四・〇)
硅 石	—	一、五 (三・〇・〇)
來待土	—	五、三 (一、〇六・一〇)
日の岡石	一俵 (二・七)	六 (三・三・〇)

昭和九年は一萬七千五百七十二圓で約四倍の

増加を示し、着色原料としては大阪方面よりコバルト類(金ツル・墨印・ライオン・鹽化・飛行船)は二〇貫九九五匁(五・九七二・七圓)・クロム酸は二、八二五斤(一、二二〇圓)・硫黄一四七貫七五〇匁(八八・七圓)・鹽化クローム一四封度(一六・八〇圓)・ルチール二五〇封度(二七五圓)・酸化銅一〇封度(一一圓)・酸化亜鉛 四八封度(二五・五圓)・鐵砂二七・四貫(二二・六五圓)・酸化滿俺一封度(五・七圓)・骨灰九封度(七・二圓)及其他の合計で七、六四四・八六圓である。

(未完)

新著紹介

○秘書類纂財政資料

上下二卷 伊藤博文編 非賣品
明治年代政治上の秘書を伊藤公の手で編纂されたものがあつたので、この頃になり秘書類纂刊行會から續々と出版されてゐる。實に維新史の根本資料として、秘藏されるべきものであるが、最近に出た財政資料の下巻には種々有益の書がのつてゐる中に筆者は輸出入品の取調書が兵庫縣運上所からの公文書として出てゐるのを見て、誠にめづらしく之を讀んだ

辰年とあるから明治十三年の輸出入品物であるのであらう、輸出にしても輸入にしても品目が簡單であり且つ珍らしい、丹柄・吳呂服・羅背板・納耳羅紗・唐棧・モヘール・タイベツなどの名目をみると古いオランダとの交通以來のことが思ひ出されて懷古の情誠に切なるを覺えた。(藤田)

○考證法顯傳

足立喜六著 三省堂發行 定價四圓八十錢
五百部限定出版、菊版二七九頁

千五百年前の中央アジア・印度・南海の地理風俗宗教に關する根本的資料たる佛國記の解釋として、我國最初の出版である、既に西洋の學者も研究を試みたことであるが足立氏に至つて、彼等のよつた經文そのものの校勘が不足してゐるのを慨し、まづ拮据勉勵して、本文の校正をなし、然るのちにその委曲を説述さるゝに至つた。耶婆提國の考などは、いかゞかと思ふけれども、全體として近來の歴史地理學界の寄與として大きい業績である。我等はかうした篤學の先輩に教へられて今更らに作すべき多くの問題のあるのを痛感してゐるものである、この本が五百部位しか賣れぬとすると、我國の讀書層もあまりに貧弱であるのが慨しい。(藤田)

○歐羅巴地誌

有賀泰雄著 刀江書院發行
定價二圓二十錢

菊版三百頁の手頃な歐羅巴地誌で、主として參考書として執筆されたもので、中學生や高等學校の學生の讀本として提供されたものである。挿畫は原書?を寫されてゐるから明快